
焼きそばと屋台

きんぎょ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焼きそばと屋台

【Nコード】

N8596I

【作者名】

きんぎょ

【あらすじ】

ある祭りでのワンシーン。人混みが苦手な少年の話。

つまるところ、僕は怖かったのだ。

体がぶるぶると震え、耳鳴りが止まらない。頭は、まるで霞みがかかったかのようにぼんやりとして、考えることを放棄していた。冷や汗が体全体ににじみ出る。

「大丈夫か？」

「……ごめん。ちょっと厳しいかも」

体調は悪くなる一方だ。友人であるCの言葉が耳に入っただけで、吐きそうになる。

「いや、俺こそ悪いな。お前がこんなに人ごみが苦手だと思わなかった」

Cの言葉に苦笑いを返しながら、腰かけている階段の冷たさに、ほんの少しだけ耳鳴りが和らいだ気がした。

しかし、それも一瞬だった。話し声、地面を歩く音、花火の音……。祭りらしい活気溢れる音を耳にした瞬間、とたんに気分が悪くなる。胸がむかむかしてきた。

「あー、何か飲みモン買ってくんわ」

「さんきゅ」

冷たいトロピカル・ジュースでも飲んだら落ち着く、というCの配慮だろう。それは、とてもありがたい。冷たい飲み物を飲んで、一息ついたかった。

じゃり、じゃり。靴と地面とが砂を咀嚼する音が聞こえる。Cが飲み物を買に行ったのだろう。もはや、顔を上げて確認する気力すらなくなっていた。

……僕は、祭りが苦手だった。

祭りだけじゃない。人が沢山いるところが駄目なのだ。昔からずっとそうだった。違和感がどうしても拭いきれない。

その場にいるだけで泣きたくなるような、目に付くものを滅茶苦

茶に壊したくなるような感覚に囚われる。その感情は、あえて言葉にすると恐怖心が一番ちかいのだろう。

そう、怖かったのだ。

人が沢山居る場所に立っていると、周り自分とがあやふやになるというのだろうか。自分が自分じゃなくなるような、そんな気がするのだ……。

刹那、近づいてくる足音があった。Cだろうか。体がぶるぶると震え、今にもぶれそうな視界。頭を支えながら顔を上げた。

そこにいたのははたして、知らない男だった。刈り上げられている髪の毛には、白いものがちらりとのぞいている。真っ白いTシャツを隠すようにつけてあるグリーンのエプロン。そのエプロンには、英語で何か書いてあったが、そこまで確りと見る余裕は無かった。それよりも、黒や、光沢の有る茶色い染みのほうが気になった。……ソースか何かだろう。おそらく、屋台を出しているのだ。

ここは、祭り会場の中にあるトイレの裏だ。だから、誰かが来てもおかしくはない。

その男性は、ちらりと僕を侮蔑を含んだ目で一瞥した。そして、なんも感情を含んでいない無機質な表情になり、横を通ってどこかに行こうとした。

心臓が激しく動悸する。座っているのに、立ちくらみのような感覚に包まれる。目の端に、ちらりと白い何かが見えた。頭がガンガンと痛む。何か鈍器で殴られているようだ。痛い、痛い――

そうして、僕は気を失った。

「えっ？」

その瞬間、僕を苛んでいた感覚が一瞬で消えた。

心がとても軽やかになった。まるで、今までずっと心に根付いていた寂寥の念がはれたみたいだ。今にもステップを踏んで踊りだしたくなるような、妙な高揚感が僕を包む。

その反面、体がとても重く感じる。肘や膝といった体な節々が痛い。心なしか、立っているだけで体を酷似しているような疲労感が

有る。運動してへばった後のような心地良い疲労のそれではなく、じつとりとへばりつくような感じた。

……立っている？

体を見る。グリーンのエプロン。黒や茶色い染み。清潔感のある白いシャツ。

「え、え？」

——名前は＊＊。五大家族の大黒柱で年は五十六。今までに六回入れ替わり経験有り。年のわりには元気で、見た目、実年齢には見えない。

そのせいか、若いくせに元気がない人を見ると、だらしなイと思ってしまう。——ああ、それで先程侮蔑を込められた目で見られたのか。

じゃなくて、これはなんだ？

全く知らない人の記憶。それが、映画のダイジェストのように脳内を駆け巡る。大事なところは丁寧に。昔の出来事になればなるほど虫食いのように飛び飛びに。

どうでもいいけれど、少年のころに食べた駄菓子屋のふがしがつてもおいしかったらしい。とても鮮明に描き出された。

入れ、替わったのだろうか。

「——おい、A！」

みっともなく、ドタドタと足音をたてながら誰かが走ってくる。

Cだ！両手にトロピカル・ジュースを持ち、息は荒く、額に汗をかいている。

Aというのは、少年だった自分の名前だ。

あわててあたりを見ると、Aが柔和な笑みを浮かべながらCのほうへと歩いて行く。

「わりー、遅くなった！　ってお前立ってんじゃん。大丈夫なのか？」

「なんか急に楽になったんだ。祭り回るべ」

「……なら、いいけどよ。ジュース飲むか？」

サンキューと言いながら、Aは、Cは、祭りの中へと行ってしまった。

……何がなんだか分からない。先程の高揚感はナリを潜め、寂寥感が俺を満たす。

ああ、腰が痛い。顔が自然としかめっ面になるのを自覚しながら、屋台をほったらかすわけにはいかないので、足を屋台の方へと向けた。

……その前に、この尿意をどうにかしなければいけない。トイレは人が並んでいるので、その辺の茂みで用を足そう。

屋台に戻ったら、焼きそばを食べよう。売り上げなんて知ったことか。そうだ、それがいい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8596i/>

焼きそばと屋台

2010年10月8日15時26分発行